

豊かさについて考える機会に

社会福祉法人 愛成会 常務理事 片山泰伸



今から10数年前、「八所施設」から「地域生活」へ。「生まれ住み慣れた地域で暮らしが出来る。」支援体制を地域の中に。そういった動きが生まれ始めていました。普通に考えれば「当たり前の事」なのですが、それが当時は、「地域」対「施設」。「施設を追いつかれるのでは」。「施設否定論者」のように言われました。また、私自身地方出身でしたから施設長さんの集まりの中で「東京は外国ですね。」、という無礼なことまで口にしてしまいました。でもこれには理由がありました。当時、地方に比べ潤沢な運営のもと利用者の方々寄り添う形で関わりを持ち、ライフステージに沿った地域資源を活用しながら地域生活が出来る機会、同様に施設の生活も地域に所属する運営を行い発信する流れが出来たチャンスであったはずなのに、そこまでには繋がらなかった。変わる機会は結構あったのではないかと思います。そこは残念に思っています。

社会福祉基礎構造改革以降、「施設職員の意識改革」が盛んに言われました。「施設職員は常識知らず。」であるとか、「社会を知らない。」とか、対社会との比較の場に立たされていたように思います。当時は、「なるほど そうだなあ。」と思う事もありましたが、今では、私達が利用者の方々との寄り添いの中で生まれてくる日常の豊かさこそ、疲弊したこの国の中で最も必要な柱ではないかと改めて考えています。「この子らを世の光に」です。利用者の方々の少しの変わりようの中に、心の糧を見出していく。嬉しそうに話すスタッフの笑顔には、やはり、福祉は「人」なり。と思います。合わせて、「豊かさ」について考えさせられます。

いつの間にか、私達は「豊かさ」を経験することのない時代に生きてきたのではないかと、承と思っています。身近にそういう機会がなかった。教育の劣化ですね。今日の社会の中では、なかなか「豊かさ」を見出す事は出来にくくなっていると思います。長い時間をかけて、じっくり変わっていく関係性。そこから醸し出される「豊かさ」は、私達の身近な所にあります。人は自然と人と出会いの中で豊かになっていく。

フランダースの犬の中で、「絵を描く人は怠け者」と主人公ネロがおじいさんに尋ねます。するとおじいさんは、「人々を感動させる、豊かにさせる絵は怠け者には描けないよ。」と応えます。利用者の方々の中にも、そういう方がいらっしゃいます。「豊かさ」は、私達の日常に詰まってるのかもしれない。

新棟「メイプルガーデン」は、街並みにある誰でも入居したくなるようなバリアフリーの建物になりました。一人部屋の暮らし。「心が豊かになる暮らし」「豊かさ」って言葉がこの世からなくならないよう、利用者の方々と共にしっかり見出し出していきたいものです。

最後に、先日参加させていただいたフォーラムの中で、「今こそ、国民の意識が変わらなければいけない。」という話がありました。私達の存在の意味を重く受け止めました。

2010.3

